背信への階段

広瀬仁紀

KADOKAWA NOVELS

闇の資金ルートを手にするのは誰か?
政財界を巻き込んだ大いなる野望が
いま始まる!! 書下し悪漢小説(ピカレスクロマン)

昭和五十九年一月二十五日初版発行

著　者　広瀬仁紀
発行者　角川春樹

カドカワノベルズ

背信への階段

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社大谷製本
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見一-一三　振替東京三-一九五二〇八
電話東京三二五-七二一一大代表　〒一〇二

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0293-771205-0946(0)

KADOKAWA NOVELS

背信への階段

—粟田ロリサーチ・センター—

広瀬仁紀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

カバー絵／中村成二
本文イラスト／柳澤達朗

目次

政界人　財界人　9
不透明な展開　39
事件の始まり　70
結末の無い情事　100
詭計のプロセス　131
告発の顚末　161
終幕の舞台　192

政界人　財界人

1

「これは何ですか!?」

粟田口リサーチ・センター、つまり、渋谷道玄坂を登りきる前に、左に曲った右手にある瀟洒な五階建の最上階の事務所まで、自分を訪ねて来た相手をつかまえて、粟田口は口早にいいながら、狼狽しきった仕種で手許に差しだされた写真を、両掌で覆うようにした。

（こんな物を見られたら、おれが悪いわけでもないのに……）

泡をくう気分になって、思った。

（横っ面を張りたおされかねない）

だが、すぐに気がついた。

粟田口の秘書兼雑用係り、兼任で電話番、要するに、粟田口リサーチ・センターのたった一人の事務員ということになる奈良原静香は、学生時代の同級生に招かれて、

（いま頃はのんびりと……）

琵琶湖畔のドライブかたがた、

（滋賀の里の古寺巡礼を……）

楽しんでいるに決まっている。

別に、狼狽して写真の構図を隠したりすることはなかったのだ。

応接テーブルをはさんで向いあっている相手が、粟田口がしてのけた動作を見たためであろうが、驚きでもした表情になっていた。

自分の早とちりに、少し馬鹿ばかしい気分になりながら、突いていた両掌をはなして、粟田口は印画紙の表面にしげしげと視線をあてた。

「うちの代議士の、夫人です」

衆議院議員／松岡威雄／第一秘書／天野浩――と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

肩書きいりの名刺を、最初にわたしていた相手が、聞きとりにくい低い声で、そういってから、かすかに眉をひそめた。
「代議士夫人、というわけですか……」
（どうりで……）
粟田口は、納得することができた。
（どこかためらっていたわけだ）
すすめられたソファに腰をおろした後、天野が持参してきた大ぶりな茶封筒から、四つ切りの印画紙を取りだす時、その手つきが、ひどくのろのろとしていたのは、当然、であったのがわかった。
（こう見たところ……）
保守党内で一派閥を率いて、大物ともいえる松岡威雄の公認の第一秘書ではあっても、天野の年齢は、（まず、四十前後）
に違いない。
それは確かに、権謀術数だけで成り立っているような政界にかかわっていれば、普通では見られるはずのない社会の裏面にふれることも多い、に違いないにしても、いまの場合、戸惑いが先にたつらしいのは、仕方ない事態であった。
「だが、天野さん。代議士夫人の物としたら……」
被写体を撮影したのが素人なのか玄人なのか、粟田口にも判定ができずにいるのだが、焦点がぴたりとあわさっているのは、間違いない。みだらな姿態が鮮明に浮きあがっていた。
「いかに何でも、これはひどすぎる」
「だから……」
天野は、ぼそっとした声音でいった。
「困っているのです。それに……」
「こんなに古いお寺が……」
奈良原静香は、すっかり感心した口調になっていた。
「滋賀県、それも琵琶湖のそばにあるとは思ってもいなかったわ」
聖徳太子の創建となると、静香が思いつくのは、奈良の法隆寺くらいのものだし、そこになら高校の

修学旅行で行ってもいたが、自分を琵琶湖の周辺の古寺巡礼に誘ってくれた下条璋とやってきた石塔寺も、聖徳太子の建立だとは相手の説明を聞くまで、知らずにいた。

「静香、面白いことを教えてあげようか……」

相手の感心のしように満足しながら、璋がいいだした。

「京都もいれてだけれど、県内にお寺が一番多い所はどこだか知っている」

「馬鹿にしないでよ」

ことさらに、つんつんとしたいい方になって、静香は答えた。

「璋がいった京都に決まっているじゃないの……」

「残念でした」

「あら、違うの……」

学生の時から、雑学博士の名をほしいままにしてきた下条璋が相手なだけに、静香は途端に自信を失った。

「それじゃあ、奈良かしら……」

もごもごした口調で、訂正した。

「駄目よ、落第」

(京都でも奈良でもなければ……)

「一体、どこなのよ」

兜をぬいだ。

もう思いあたる場所がなかった。

「何をかくしましょうか……」

相手は思わせぶりな顔色になった。

「ねえ、どこなのよ」

答えをせかした。

相手の答えを、待ちかねているとなれば、粟田口の場合も同様、だった。

「それに、何だとおっしゃりたいのですか、天野さん」

話の続きを、少しせわしない声音になってうながした。

実際、粟田口にすれば、相手をうながしたくもなるのだ。

印画紙に鮮明に浮かびあがっている松岡威雄代議士夫人の姿態は、それほどに大胆きわまりないものであった。
「この写真は、議員会館の、うちの代議士の事務所に書留郵便で送付されてきたのです」
「書留、で……」
そんなところではないのか――と粟田口がつけていた推測は的中したが、
（だとすれば……）
事態は一気に、単純なものにならざるを得ない。
「つまり、代議士夫人ともあろう女性の、この種の写真、正確にいえばネガをもっているから、どうこうしろという脅迫状も同封されていた、というわけですか？」
「いや、郵送されてきたのは……」
相手の表情も、小首をかしげるものになっていた。
「この写真、三枚だけで、脅迫状などははいっておりませんでした」
「写真だけ、だったのですね」
「そうです。だから……」
ぶるっと顔を、天野は左右にふってみせた。
「何が狙いで、こんな物を送りつけてきたのかが、一向に判断できないのです」
相手がいっているとおりであるのに、違いなかった。
「なるほど……」
粟田口も、何がなんだかわからない混乱にとりつかれながら、頷きかえした。
「脅迫状が同封されていなかったとなると……」
何故、この手の写真を、わざわざ送りつけてきたのか、という差し出し人の意図がわからなくなってしまう。松岡を脅迫するのに、絶好の物であるだけに一層わけがわからなくなる。
「何が目的で、馬鹿な真似をしたのか、判然としなくなりますね」
「そのとおりなのです。私も、ですから、当惑する一方でおるのです。何が狙いなのかが、わからんのですから、対策の講じようというものがありません

のでね」
「天野さん、そのあたりは暫くおくとしてですが、別の角度からの質問に、お答えいただけますか……」
「どう対処したらよいか、途方にくれておるのです。何なりとお訊ねください。出来るだけ正確に、お答えするようにいたします」
方途に窮しているのは、天野の声音、いいまわしを聞いても間違いなかった。
「それではおうかがいいたしますけれども、松岡代議士夫人のお齢は……」
「ちょうど三十のはずです」
「ほんとう、なの……」
思いがけない返事を聞かされて、静香は素っとん狂な声をあげた。
「お寺の数は、滋賀県が一番多いんですって、知らなかったわ」
京都府内が三千一寺。
奈良県内が二千八寺。
それが、
——滋賀全県で三千二百九十八寺。
と、下条璋が具体的な数字をいっていたのだから、静香にしても納得せざるを得なかった。
「断然、滋賀県が多いのねえ」
そういいながら、相手と二人きりで立っている石段の際から上をふりあおいだ。
琵琶湖の西岸で、これも聖徳太子の立願で推古天皇二十六年に建立された天台宗真盛派の総本山、西教寺、その前に三井寺の門跡寺をまわり、西教寺を過ぎて湖畔に抜ける手前で、天台宗延暦寺歴代の座主の墓が苔むす墓所に参拝をすませてから、湖面を車窓の右に眺めてのドライブを続けて大橋を渡り、閑散とした道路を走って山坂の道にはいった。
もっとも、山道といっても完全に舗装されていて、バスがすれちがえるくらいの幅があるから、大学で自動車部にいた下条璋にすれば、何ということのないコースらしく、木の間がくれに左右の脇、下に見

えるゴルフ・クラブの芝生の緑を楽しみながら、登り始めて十五分たらずで石塔寺の駐車場に着いたのだった。

三月の末、早い桜は花をほころばせかけているというのに、風花が舞い始めてきた。

周囲の空気に音がすいこまれでもしたように、静寂が二人をつつみこんでいる。

「素敵だわ」

ここに初めての静香は、相手にあらかじめいわれて着こんでいたコットン地の、淡いブルーでリッチモンドのコートの襟を、無意識に引きつけながら、呟くようにいった。

「こんな日に、上に行ったら……」

何度か来たことがあるらしい下条璋が、そこの光景を期待しているのがわかる弾んだ声でいった。

「きっと、もっと素敵よ。さあ、登って見ましょうよ」

学生、いや、小学生の頃にもどったような気分になって、二人は、

——一つ……

——二つ……

——三つ……

交互に石段の数をかぞえながら、高い階段を登り始めた。

——五十一……

——五十二……

下で見た時は、ひどく上りにくそうな感じだったのに、勾配が巧みにつけられているせいか、思ったよりははるかに容易に登れる。

——百五十六……

——百五十七……

までかぞえて、登りきった台地に立った時、予想もできなかった台地の光景に、静香は呆然とする気分になって息をつめた。

下条璋の話で聞いていた五輪の、阿育王宝塔が、折からの風花の雪片に舞いつつまれて、寂然と高壇にたっているのが見えたから、であった。

この世のものとは思えない静かさが、台地の上を

支配していた。
（こんなことが……）
溜息を吐きだしながら、静香は泣きたいような気分になって思った。
（まだ、あるのね）

2

泣きだしたいような顔色になら、粟田口の質問をうけ始めた天野もなっていた。
内心で苦悶にたえているらしいのがわかる表情、といってもよかった。
（ここまで露骨に訊きだす必要はないかもしれないが……）
実際問題となれば、洗いざらい訊きださないことには、事態を正確に把握し、判断をつけることもできなくなる。
（だからといって、つまらない遠慮をしていたのでは……）

粟田口リサーチ・センターの事務所と、隣接部分をプライベート・スペースで自宅がわりにしている五階建のビルのオーナー、尾崎雄策が以前の顔みしりの縁で、わざわざ紹介してよこした天野の期待に、
（結果的にそえないことにもなりかねない）
それより何より、なりふりかまわずに天野が駆けこんできた以上、こちらの調査が松岡夫妻のプライバシーにふれてくるのを、承知でいないはずはないのだ。
「確か、松岡代議士は……」
相手の内心の苦悶は無視すると決めて、粟田口は質問をすすめた。
「今月で六十歳になった、そうでしたね」
権威があると評価されている『紳士録』と、『国会議員便覧』で、松岡の経歴、家族構成を調べたのだから、いま念をおした相手の年齢にくるいがあるわけはなかった。
（が、それにしてもだ。細君の年齢までは……）
粟田口も気がつかずにいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton